

日本山岳会の図書室は 国内唯一の山岳専門図書館

水野 勉



2000 年 (平成 12 年)
4 月号 (No. 659)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円



図書室の蔵書 左は磯野計蔵文庫

目 次

日本山岳会の図書室は国内唯一の山岳専門図書館 …… 1

海外の山 …… 5

報告

図書委・山岳図書を語る夕べ… 6

総務委・支部事務局担当者会議 7

海外連絡委・AAJ編集長来日… 7

アルパインスケッチクラブ・山好きの山の絵展 …… 8

支部だより・静岡支部 …… 9

平成11年度海外登山基金助成 … 9

東西南北

山名を大切にしたい …… 10

田口二郎氏の『山の生涯』とアイガーヴァントをめぐる… 2 10

せひマロリーの原文を …… 11

ふるさと山・川を考える … 11

会務報告 …… 12

ルーム日誌 …… 13

INFORMATION …… 14

図書受入報告 …… 14

▶ 日本山岳会事務(含図書室) 取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 … 10~18時

■ 図書室の推移

本会が虎ノ門不二屋ビルにはじめてクラブルーム・図書室を持ったのは一九二九年十一月である。それから今年で七十年以上経っている。その間、虎ノ門のクラブ・図書室は戦災で焼け、戦後、御茶ノ水に山小屋風なクラブ兼図書室が設けられたのは、一九四九年三月であった。

本会図書室については、多くの会員が訪れており、その内容は知られていないと思われるが、地方の会員や入会して間もない会員のために、あるいはルームを訪れてはいても図書室のことをあまり知らない会員のために、概要を紹介したい。さらに、図書室を利用したことのある会員でも案外その全貌を知らないこともあると思われる。この原稿がいささかでもお役に立てば、と思う。

この御茶ノ水のルームは約十五年間続き、会の発展に大きな貢献をした。戦後の荒廃した時期に、この図書室がどれほど会員の要望に応えたか、また心の慰めになったか、計り知れないほどである。マナスルはじめ、いくつかのヒマラヤ遠征の計画も、この御茶ノ水のルーム・図書室においてなされたのである。

一九六四年七月、体協の移転に伴い外苑コーポの一室に移ったが不評で評判が悪く、神田錦町の向井ビル五階に、一九六七年六月に移った。ここは皇居の外堀に面し、居心地のいい図書室であったが、家主の都合で立ち退きを迫られ、一九七三年五月に湯島のさくらビル七階に移転した。

このように、何回となくあちこちと移転することになったのは、自前のルーム・図書室を持たないため



高頭式著「日本山嶽志」初版本



小島烏水著「アルピニストの手記」初版本



木暮理太郎著「山の憶ひ出」愛蔵版

あった。そのたびに膨大な図書の移動は大変な労力を必要とした。それは一部の会員の尽力で解決してきたけれども、そうした不便さをいつまでも続けることはできないと、自分たちのルームを入手することになった。そして一九七八年一月に、現在のサンビュウハイツ四番町の自前の新ルームに移転したのである。

■所蔵本は一万三千冊以上

図書室は事務室とは通路を隔てて

別室となっている。そして、書庫と閲覧室とに分かれている。

書庫の一部は固定式の書架となっているが、主としてレールによる移動式の書架である。閲覧者は自由に希望の本を手にとつて選べるようになってい

る。閲覧室には、ほぼ四角な閲覧用のテーブルが置かれている。そのほか、新着の内外の山岳雑誌・会報と単行本、レファレンス・ブック、ガイドブック(ガイドとしての地図を含む)が書棚に置かれている。これらは常に新しいものに置き換えられる。また書庫が狭いために、本来は書庫に収められるべきいくつかの旧個人蔵書と貴重本を入れた書籍、地図ケース三つが壁際に置かれている。旧個人蔵書は望月達夫文庫、磯野計蔵文庫、山崎安治文庫、神谷恭文庫であ

る。この他に、パソコンが奥に置かれている。

現在、所蔵本の冊数は、和書約一万冊、洋書三千五百冊である。この他、雑誌・会報類が二万冊くらいである。

書庫の書架は洋書、和書、雑誌・会報類の三つに大きく分けられている。洋書と和書は、さらに主要な項目別に分けられ、それらの項目が通路側に表示されている。さらに、著者別になつていて、洋書はアルファベット順、和書はアイウエオ順に並べられている。しかし、写真集のような大型本は普通の書架には入らないので、別の書棚に集められている。また、全集、叢書などは著者別ではなく、一括して収められている。

地図ケースは書庫にひとつ、閲覧室に三つある。書庫のひとつには古

い日本の地図が入っている。といっても明治以降のもので、陸地測量部と地質調査所作成の地図である。閲覧室にあるケースのひとつには、現在の国土地理院発行の二万五千分の一地図が全部揃って入っている。その他の二つのケースには海外の地図がヒマラヤ・カラコルム関係、その他の地図に分けられて入れられている。

閲覧室の旧個人蔵書のうち、望月達夫文庫はすべて洋書であり、主だったヒマラヤの古典が揃っている。しかも概して美本である。山崎安治文庫の特色は、故山崎氏が『日本登山史』を執筆するにあたって参考にした地誌、地方史などが揃っていることである。磯野計蔵文庫には、日本および海外の主な古典が入っているが、いささか保存が悪いのが難である。神谷恭文庫は冊数は少ないが、『霧の旅』などの珍しい文献が揃っている。

貴重本のケースには、洋書の古い稀覯本および江戸時代の主な旅行記が収められている。また、本会発行の稀覯本である写真集『高山深谷』第一輯・第八輯があるが、これは現在、一つ一つ保存箱に入れられ、山崎安治文庫の書籍に収められている。また現在、蔵書の一部は東海支部事務所と上高地山岳研究所に委託し

■自慢できる各国山岳会報

本会の図書室は文字通り山岳図書館であり、山岳関係の文献を集めた専門図書館である。したがって、会員が経済学者であったり、物理学者で優れた著作があったとしても、あるいは、会員の詩人が優れた詩集を出したとしても、その内容が山岳にまつたく無関係であれば、それらを本会図書室には取めないことにしている。もちろん、探検や初期の旅行に関する文献は、所蔵することになっている。直接登山に関係ないとしても、未知を探るといふ点では極めて登山に近いばかりでなく、ヒマラヤ中央アジアなどにおいては、まず旅行や探検から登山が始まったからである。そしてまた、日本において初期の旅行や探検に関する文献を収蔵している専門図書館が存在しないからでもある。国会図書館や東洋文庫や国立民族学博物館、あるいは多くの大学付属図書館には、そのような文献がそれぞれ収蔵されているが、専門図書館ではない。その点においては質量ともに貧弱ではあるが、本会図書室は日本における唯一の専門図書館なのである。

なお、登山の文献そのものではないが、民族学や民俗学に関するものも若干所蔵している。そうはいっても、登山や山に関する文献なら何でもあるわけではない。ガイドブックに類するものは、最新のものにはレファレンス・ブックとして書棚に置くが、古いものはなるべく置かないことにしている。これには反対意見があることも承知している。ガイドブックであっても、将来文献として役立つものもあるという意見である。しかし、収蔵スペースから考えて、登山文献として重要な少ないものは、なるべく収蔵しないことにしている。そしてまた、第二次大戦後に国会図書館ができてからは、日本で発行された本はすべて、そこに収められることになっていくから、参照するには困らないはずである。図書館においても分業システムができてきつつあることは好ましいことである。

登山にまつたく無関係な本も一部収蔵している。それはレファレンス・ブックとしての辞典である。現在、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語、中国語、韓国語、ネパール語などの外国語辞典のほか、漢和辞典も置いている。日本の山岳文献の主な古典はすべて揃っている。版が違えば、それもあるべく揃えることにしている。さらに、大学および旧制高校の山岳部

部報も、完全ではないが、かなり揃っている。戦前の主な社会人山岳会の会報は、残念ながらあまり揃っていない。これはかつての本会が大学山岳部中心だった名残である。

日本の山岳雑誌は大体揃っている。「山と溪谷」「岳人」「アルプ」「ケルン」「山」「山小屋」などはほぼ完備である。「登山とスキー」は大分欠号がある。

洋書は、本会図書室の最も特色のある蔵書である。和書については、個人蔵書でもかなり優れたものもあるし、前述したように、国会図書館にも戦後発行のものが所蔵されている。しかし、この図書室に収蔵されている洋書ほどの量と質を備えたところは日本では見当たらないであろう。ヒマラヤ、カラコルム関係の古典はほぼ揃っているが、その点では望月文庫の占める位置は大きい。アルプス関係の古典も有名なものは大方揃っているが、残念ながら中央アジア関係の文献はほとんどないといっている。新発行の重要な登山の本はなるべく集めるように努力している。

本会がもつとも自慢している蔵書というと、世界各地の山岳会の会報がかなり揃っていることである。イギリス、アメリカ、スイス、イタリア、ドイツ・オーストリア、オランダ、インド、カナダ、台湾、韓国などの山岳会の会報がかなり揃っている。「アルパイン・ジャーナル」や「ヒマラヤン・ジャーナル」が揃っているのは当然だが、「カナディアン・アルパイン・ジャーナル」が全部揃いなのは、たぶん世界でも珍しいであろう。不揃いながらスペイン、ベルギー、チェコスロバキア、チリ、アルゼンチン、ニュージーランドなどの山岳会の会報まで所蔵している。イギリス地理学会の「ジオグラフィカル・ジャーナル」は初期の号はまつたくないが、戦後発行の号は現在までほぼ揃っている。これは何とかして創刊号から揃えたいと思っ

日帰りからキマンジャロ、マッターホルンまで

全国ネットの山旅専門店！
安全で快適な山旅を、中高年からお一人様までサポートします。各コース経験豊富なツアーリーダー同行で安心。
おすすすめオリジナルプラン手配OK
人気の山旅スタイル、気軽にお問合せください。

2000年度カタログ
国内246コース、海外111コース、自然に学ぶ旅36コースの総合カタログ(全134ページ)をお送ります。
各地発着それぞれのカタログをご用意しました。送付無料。

アムューストラベル株式会社
〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-22-2 新宿サンエビルB1
TEL 03(5325)1256 FAX 03(5325)1258
大塚 06(6456)3366 名古屋 052(588)5617 札幌 092(414)5566
広島 082(502)2525 北海道 0120(802)514(東京へ転送)

いる。そのほか、イギリス、ドイツ、アメリカなどで発行されている新しい山岳雑誌もいくつか購入して収蔵している。

このように、世界各地の山岳会などの会報をその初期の号から広く収集して所蔵している図書室は、他の国の山岳会でも数少ないであろう。これは誇りにしていい。ただ、地理学会の会誌や地理学雑誌が『ジオグラフィカル・ジャーナル』（それも初期の号はまったく残念である）を除けば、まったく残念である。

地図については、日本の陸地測量部および地質調査所発行の初期の地図がかなり収蔵されている。この中には稀覯な地図も含まれていて、登山史研究にとっては重要な資料である。ヒマラヤ、カラコルムの古典的な地図はほぼ揃っているが、中央アジアの地図はほとんどない。南極の地図は極地発行の最新のものが揃っている。

■図書室の現実と将来の夢

本会図書室は、日本における唯一、最大の山岳図書館としてこれからも存在しつづけるであろう。所蔵冊数はそれほど多くないにしても、他の図書館にはない、山岳専門の特色ある図書館として存在しつづけるに違いない。前述したように、世界のほ

かの図書室と比べても、特色ある存在であることは事実である。イギリス山岳会の充実ぶりにはとてもかなわないが、世界の他の山岳会の古い会報を本会図書室ほど揃えている山岳会は、他にほとんど見当たらないであろう。スイス山岳会やドイツ・オーストリア山岳会には膨大な蔵書があるが、世界全体の山岳会へ広く目を向けているとは思えない。

そうはいっても、現在の蔵書の内容に満足しているわけではない。少し考えただけでも、収蔵すべき本が欠落している。よく検討すれば、あれもない、これもないという結果になるであろう。予算のこともあるけれども、古書の場合、それが珍しい本であればあるほど、常に広く情報を把握していなければならぬ。資金があれば入手できるとは限らない。もちろん、どんなに高価でもいいというのであれば容易になることもあるが、妥当な価格で入手するのは意外に難しいのである。

本会の伝統として、図書室に収蔵される本のほとんどが会員の寄贈に頼ってきた。現在でもそうである。また第二次大戦以前においても図書の購入を行っていたが、その際でも一般会計からではなく、図書購入資金は別に会員の寄付を仰いで行われていた。もともと、そもそも図書館

というものは、どこの図書館であれ主として寄贈によって成り立っていることは否定できない。しかし、すべてをそれでまかなうというわけにはいかない。それでは欠落が生じるからである。

さらに本会図書館に収蔵する必要のない本の処理を進める仕事がある。どの図書館であつても、常に蔵書の内容を見直して、必要のない本を処分していかねばならない。これを怠ると、収納スペースがなくなるばかりでなく、図書館としての質が下がってしまう。量さえあればいいというものではない。

筆者はこの十年ばかり図書室の管理にかかわっているが、非力なことではもちろんだが、怠惰のために、ライブラリアンとしての仕事を十分に果たしていない。慚愧である。ライブラリアンは蔵書の充実を図るのももちろんだが、会員の研究調査にも相談あるいは助力できることが望ましい。また、筆者も時々対応してきたが、会員外の照会あるいは依頼にも応える必要がある。さらに海外からの照会依頼に答え、あるいは研究調査にも協力していかねばならない。筆者の慚愧を棚上げにして、ライブラリアンとして夢見るのは、清潔で、静かな図書室の棚に、重要な文献がほとんど並んでいるのを見渡す

ときの喜びである。そして、研究熱心な会員に対して、親切に協力ができることである。

■もっと利用してほしい

図書室の利用方法については、「会員名簿」に載っている「図書利用規定」に書いてあるので、ここで述べるのは省略したい。

現在では、図書の利用は本人が図書室で行うことになっている。貸し出しは原則として禁止している。将来は地方会員のためにも、便宜を図ることも考えなければならぬ。コピー・サービスも必要であろう。

ただ、現状は図書のすべての雑務は一人の事務職員が一般事務と兼務で行っているため、そうしたサービスはほとんど不可能である。これも将来の夢である。

さらに、専属のライブラリアンがないので、照会に対して直ちに答えることも不可能である。ただ以前と違い、蔵書は雑誌会報類を除いてすべてパソコンに入力されているから、収蔵の有無はすぐわかる。かつてカードで探していた頃の苦労は夢のようである。

最後に、蔵書は保存が目的ではなく、利用するためにあるのだから、多くの会員がこの特色ある図書室を利用されることを希望する。

海外の山

吉尾弘 滝沢に死す

江本嘉伸



若き日の吉尾弘。
(1964年3月谷川岳一ノ倉沢で)
写真提供・湯浅道男氏

ナホトカ航路と聞いて、青春の日々を思い出す人は日本山岳会の平均年齢にあたる世代だろう。一九六四年四月に海外渡航が自由化された当時、若者たちは横浜―ナホトカを結ぶこの航路とシベリア鉄道を經由してあこがれのヨーロッパへ向かった。

一九六五年六月、吉尾弘も「バイカル号」に乗って、ヨーロッパをめざした。行く先はアルプスの北壁。湯浅道男、石川富康、加藤滝男といったクライマーとともに全日本合同隊の隊長としての出発だった。

海外の山は長い間、手の届かないところにあった。あこがれのアイガー北壁に日本人がはじめて挑戦したのは一九六三年八月、芳野満彦、大倉大八によってだった。二人は翌六四年にも渡部恒明を加えて再挑戦したが、落石を受けて敗退、課題は翌年に持ち越された。

六五年夏は、実に日本から七つの隊がヨーロッパ・アルプスの北壁に

集中した。中野満をリーダーとする全日本山岳連盟隊、芳野・渡部隊、大倉大八隊、日本モダンクライマースクラブの松島利夫を隊長とする日本登山学校隊、単独の高田光政、高嶺山岳会の大谷計介隊、それに吉尾らの全日本合同隊である。

最初の成功は八月六日、芳野、渡部によるマッターホルン北壁の日本人として初の完登だった。吉尾も、前後してヴェッターホルン北壁とドリユ北壁を完登し、気を吐いた。主目標であったアイガーは悪天が続く、吉尾隊の石川ら三人は二ヵ月近くも壁の基部で待機を強いられただけく、登攀二日目に退却を余儀なくされる。

アイガー北壁の日本人初登頂は、悲痛なものとなった。ソロの高田光政が、芳野隊の渡部とザイルを組んでこの難壁に向かっていた。芳野は足をマッターホルンでいたため、渡部と登ったらどうか、と高田に呼びかけたのだ。二人は、風雨について登

攀を続行し、八月十五日、頂上直下三〇〇メートル地点に達した。ここで渡部が三、四〇メートル墜落、動けなくなった。高田は渡部を確保した上、すべての食料を置き、ひとり頂上まで登り切って下山、基部の小屋にいた吉尾に救助を求めた。吉尾はただちに救援隊を組織し、西陵から頂上に向かったが、すでに渡部は一三〇〇メートル下の北壁基部に墜死していた。

日本登山学校隊の林与四郎、飯田博子の二人がプレチュール峰から山中遭難死したこともあり、この遭難は日本で波紋を広げた。「神風登山」と酷評した新聞もあり、そうした新聞報道をめぐって議論も出た。

第二次RCCが発刊した「挑戦者―六五年アルプス登攀の記録」という本がある。この中で吉尾弘は「嵐のひと夏」という文章を書き、当時の心情を吐露している。へいざ事故が発生するや、すべてを救助にかたむけた合同隊の仲間たち、全岳連隊の人たち、彼らの心情を思うとき「ゴキブリ登山家」とか「神風登山者」とかの愚劣な表現で、軽薄にもジャーナリズムに迎合するアイガー批判を書いた心ない人たちに、帰国当初私は腹の底から怒りをおぼえた。

しかし、RCCのアルプス登攀報告会も済んだいま、日本のアルピニズムにおけるこれらの矛盾は、すべてこの国のアルピニズムの歴史の混

乱に起因するものであって、けっして個人を責めるべきではないと考えている。

吉尾弘の名が登山界に一躍知られるようになったのは、一九五七年三月、谷川岳滝沢下部の積雪期初登を原田輝一とともになしたとげた時だろう。この時弱冠十九歳。その後も次々に難ルートに挑戦し、とりわけ一九六二年一月、篠原隆夫、林与四郎（前述のように、後にアルプスで遭難した）とともに十九日をかけて完登した「屏風岩東壁―前穂高岳東壁右岩稜―同Dフェース連続登攀」は、強烈な印象を残した。

アルプスの日々から三十五年が過ぎた三月十三日夕、吉尾は三人パーティーで谷川の滝沢リッジに登攀中滑落、十六日遺体で収容された。六十二歳だった。

吉尾は、若い登山家を育てることに情熱を傾けた。労山という大組織の会長におさまっても、「ザイルのトップ」は譲らなかつた。（取付のストラップは雪のつきが悪く、滝沢リッジの雪も悪く不安定で「騙しだまし」登ることを強いられました。そのルートを吉尾会長はすべてのピッチを二本のロープを引いてリードしましたと、三月二十六日、千葉県でのお別れの会で参会者に配られた「遭難の概要」には書かれている。

山に本気で向かった者の、ひとつの生き方を吉尾弘は生きた。

報告

REPORT
4月日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

図書委員会

山岳図書を語る夕べ

「山岳雑誌編集を通じて
山を語る」

昨年の十一月二十六日、本会ルムで雑誌『山と溪谷』の前編集長、神永幹雄氏に、本を作る側から見た山を語っていただいた。

出版界はこれまで不況に強いといわれていた業界であるが、中小出版社に限らず大手もここ数年の不況は深刻である。本・雑誌が売れない上



講師の神永幹雄氏

に広告も減りコミックまで売れなくなった。本屋に行く人は減ってはいないが特定のものしか売れないし、かつてはロングセラーというものがあつたが、今は本の寿命は短くなつてきている。

本を作るのに、書く人も編集者も営業も書店もそれぞれ苦労しているが、ユーザーの側のチェックが非常に厳しくなっている。逆に読者の側に立ってみると、昔は少し余裕があれば本を買うという感覚だったが、今では飲み屋とかパチンコでならすぐ使ってしまう金額も本を買うとき金をはたすように、知的なものにはいかという気がする。

社会全般を本との関連で見れば、十年前と比べて電車の中で本を読んでいる人が少なくなつた。活字分野が携帯電話に時間とお金を食われているが、インターネットの普及に

も影響されて、これからの若い世代は新聞を手にしないうで、テレビと携帯とインターネットがあれば情報の収集はそれでこと足り、活字がないことに特別な意識を持たない世代が生産されるのではないかと気がする。希望的観測として活字は多分なくならないと思うが、版元が急速な変化に対応し切れなくなつて、安直なものを出したくなるというのが、これからの状況ではないかという気がする。

中高年の登山者が増えたにもかかわらず山岳図書が売れない理由のひとつは、限られた山の本の出版が、新しい出版社も参入して過剰になっていることがあるが、他の要因も考えられる。

中高年登山者の増加は山の世界のハードな部分の変化、交通が便利になりアプローチが短縮されたこと、用具が発達したこと、山小屋を含めた近代化などで素地ができた上に、会社一辺倒だった人たちがレジャーに力を入れるようになったことなどがある。しかし、このブームを支えている大多数が、いわゆるレイトビギナー派で、この層に問題があるのではないだろうか。彼らは山の本に親しんでいないというか、本を読むトレーニングがなされていないのではないか。しかも山の本を読まなく

ても安直に山に行けるようになった、地図なしでも山に行ける、読書の習慣がなくなった、などの相乗効果が考えられる。山にあれだけ多くの人がいるのに本を読んでいる人が少ないのはさびしい気がするが、そういう人たちに、魅力的な本を作つて読んでもらうためには「面白くてためになる、感動させて得させる」という四つの要素を念頭において本を作ることが大事だ。

以前はハイキングからはじめて日本のアルプスへ、そしてヨーロッパアルプスへとというヒエラルキーというものができていたが、最近はある程度のお金と技術と体力があれば、八千メートルに登ることができてしまう。同じ現象が日本の山でも見られる。このような登山界と書籍の状況の中で、編集作業とは自分の興味と社会の関心とのバランスをうまくとり、両者の橋渡しをしながら形にしていくものだが、そこに編集者の高い能力が必要となってくる。若い編集者には①外に出ること―山に行く、人と会い、肌で感じる。②捨てること―集めた材料を捨てることでテーマが鮮明になってくる。③目を養う―一流の人、書物、登山家、絵画、などを通して自分の目を養う。④二重の目を持つこと―編集者であると同時に読者であれ。⑤体力仕事

であることを自覚しろ。⑥売る努力をしろ。この六つのことを常に言っているが、これは書く側にも通じることである。

昨年売れた本で見ると読者がある程度イメージできた本である。ではどうすれば本が売れるかというところ、王道は先ほど述べた四つの要素を念頭に、読者をイメージしていけば、まだ捨てたものではないと思う。登山は野球やサッカーに比べれば経済効果は少ないが、そこが山のよさであり、こつこつ作っていくのが山の本ではないかと思っている。

以上が講演の要約であるが、示唆に富んだ内容の故に、後の質疑応答も活発で、受け手の問題、アンケートの紙面への反映、販売の方法、電子出版、売れる特集とは、昨今の百名山ブームの影響、ガイドブック、海外雑誌情報、執筆者、などを巡る問題点に話題が広がり、山登りのあり方を通じた文化論といった趣の内容であった。(泉 久恵)

総務委員会

平成十一年度支部事務局
担当者会議

支部活性化の工夫を披露

恒例の支部事務局担当者会議が二月二十六日(土)および二十七日(日)に行

われた。一日目は水道橋の東京グリーンホテル、二日目は本会ルームを会場とし、全国の支部から二十五名が参加した。

一日目は、冒頭に大塚会長が「切所に臨んで」と題した講話を行った。マロリーの遺体を見たときに味わった感動。アメリカ山岳会が会員の登山活動の権利を守るために、クラブ形態から会社形態に組織替えしたこと。また山岳会が自ら活性化を図り、会員数を増やしていく方法を考えなければならぬことなどを強調された。

次に「支部活性化を考える」というテーマシンポジウムに移った。

基調講演として、岐阜支部から昨年行った「全国支部懇談会」の運営方法とそれが支部の活性化につながったことを、山陰支部からは支部会費六千円を徴収するという裕福で活気ある支部活動ぶりを、宮崎支部にはNHKの登山教室の講師をした、宮崎ウエストン祭を小学生はじめ町と共催で行うなど、外に開かれた支部作りの運営方法を発表してもらった。

これを受け、北海道支部の三十周年行事にまつわる多くの取り組み、青森支部のブナの植林、秋田支部の四十周年行事、信濃支部のウエストン祭、越後支部の高頭祭、山梨支部

の木暮祭や碑前祭、富山支部の播隆祭、東海支部の伊吹山播隆祭、さらに関西支部や京都支部の活性化の方法などが披露され、最後に静岡支部より、原点に戻って考えたい旨の話があった。

懇親会は場所を変え、近くの料理屋で行ったが、活性化についての話が持ち越され、楽しく実りある一日になったようだ。

翌日は、本部からの会務報告と今年九月に東九州で開かれる全国支部懇談会の説明、各支部よりの質問や要望、それに山研委員からの報告と利用のお願いなどがあり、昼食後散会となった。(永田弘太郎)

海外連絡委員会

AAJ編集長、クリスチャン・ベックウイズ氏来日

アメリカ山岳会(AAC)の知日派、元会長ニコラス・クリンチ氏の意向がきっかけとなって今回の来日を実現した。ベックウイズ氏三十一歳、好青年である。ワイオミング州ジャクソン在住。登山歴八年。海外での経験は天山山脈とチベット北部。一九九四年に他界した名編集長アダムス・カーター氏の後を引継いだ時は弱冠二十六歳であった。能力と将来性に賭けるベンチャー・ビジネスを育むアメリカの風土を象徴す

●新ハイキング選書●

藤井寿夫著

中央線の山を歩く

A5判・286頁・定価1680円(税込)

中央線の山を歩いて50年、中央線の山107座の紀行と案内。朝立ち、日帰りの範囲内、あまり登山者の歩かれていない山に重点を置いている。読物としても楽しい。最新刊 増刊出来

●深田クラブ編●

深田久弥の研究

読み、歩き、書いた

飯島齊 高澤光雄 高辻謙輔 深田クラブ編集部 共著

A5判・387頁・定価1680円(税込)

深田久弥の研究に造詣の深い三氏が、深田クラブ会報に、永年にわたり発表された成果をまとめたもの。深田久弥はこの一冊で全貌を顕す。

新ハイキング社 東京都北区滝野川7-6-13
電話・FAX 03(3915)8110

る起用といえよう。このあたりは江本嘉伸さんのコラムにあるので省略。ベックウイズ氏はJAC（海外連絡委員会窓口）の招きでAACの正式の代表としてやって来た。二月十三日から二十一日まで滞日。両山岳会の公式の交流としては十五年ぶりのことと思う。二月十四日のJAC本部・大塚会長との昼食会、講演・シンポを皮きりに、日本の登山界との接触を深めた。スピーチのテーマは「アメリカ登山界の現状と将来の展望」。JAC側も坂井理事、谷川古野両会員がプレゼンテーションを行った。関西ではJAC京都支部とAACKが音頭をとって歓迎してくれたし、広島でもJAC支部にお骨折りをいただいた。日山協のセミナーでは同じ主題の話をした。HAJは中国情報を提供してくれた。クライミングも楽しみ、山野井氏をはじめ若手の登山家との親交をはかることもできた。ベックウイズ氏にとっては満足のゆく成果が得られたことだろう。JACとAACの関係に新しいページが開かれる契機となることを期待する。

経緯や行事的なことはこのくらいにして、私が強く印象づけられた編集長の登山に関する評価と洞察力をスピーチの最後の部分から紹介したい。「二つだけ変わらないことがあ

ると思います。それはクライミングの精神です。能力、国籍、時代に関係なく私たちの心の奥に行動の原点として存在し、結果が予測し難い状況に敢えて遭遇したいという奔放な好奇心です。クライマーたちはそんな状況下で自分自身を観察し見直すことを通して、それまでは想像でできなかった自分を発見できることを知っています。この自己の再認識がクライマーを天空に聳える高峰へ送りだすのです。未来の私たちをいかなる世界へ導くにせよ、クライミング・スピリットは常に存在し、失敗と成功の狭間で傑作として残るルートを開拓し、私たちが次の大いなる冒険へと誘うのです」自己実現をフロンティアに求めるアメリカの若さと活力を感じさせるメッセージである。

(中村 保)

アルパインスケッチクラブ

第九回、山好きの山の絵展

登る山、眺望の山、山への想いをテーマに、今年も有楽町の交通会館において二月二十〜二十六日の間、「山好きの山の絵展」を開催しました。

スケッチクラブ創設当時の道玄坂の会場における開催から、交通会館二階ギャラリーに移ってからの今日

今年もさくらげんで会いましょう

まで、山岳会の皆さまをはじめ多くの方々から、本当に温かい励ましをいただき、心から感謝しております。今年も二千人を超える方々が来場され、山の想いを私たちと分かち合ってくださいるとともに、さまざまな感想をお寄せいただきました。また、この展覧会が山仲間など旧知の方々の出会いや歓談の場ともなっている、いわば「山好きのサロン」効果をもたらすのも、主催者として望外の喜びです。

さて、来年の同じ時期に予定している二十一世紀初の山の絵展は第十回目になります。私たちのアルパインスケッチクラブも、二〇〇〇年四月から十年目という節目の年に入ります。私たちの山と絵とのかかわりは、山に立つ感動をその場でスケッチブックにぶつける、回想や憧れの山を思いを込めて描く、など取り組み方はさまざまですが、原点は山への想いです。そして、大半のメンバーにとってそれは趣味であり、趣味であるがゆえに楽しいものであるとともに、真剣でなくてはならないと考え

ています。またその真剣さゆえに、ほとぼしる感性の表現が、来場の方々と山への想いを分かち合うものであることを願うのです。

これからの一年、第十回を目指して、国内あるいは海外の山に出かけ、山を描きたいと思えます。

(第九回実行委員会)



有楽町・交通会館の展覧会場で



JAC 支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

静岡支部

秋季懇親山行・鳥森山

平成十一年十一月十三、十四日の予定で進める。場所は大井川上流樞島の鳥森山(二五七〇・七メートル、三等三角点)とし、宿泊は静岡市田

平成十一年度海外登山基金 助成について

海外登山基金委員会

平成十一年度の海外登山基金助成は、応募のあった八団体について一月十九日、当委員会でも審議しました。応募要項の「困難を求めての挑戦、発想の新鮮さ、夢大いなる計画……」に即した登山隊ということで次の二

代の民宿「ふるさと」に決定した。

十三日の午後四時半までに、静岡駅から会員の車で向かう組、それぞれ自分の車で民宿「ふるさと」に集まる人とまちまちではあったが、集合時間には全員が到着。

明日の山行を予定より少々変更したことや、樺島までの同乗車両の割り当てを決定した後、懇親会場を移動し、鹿肉の刺し身や鹿鍋で夜のふけるまで飲み続いた賑やかな一夜をすこした。

翌朝、仕事の都合で宿泊できなかった女性四名が到着。午前八時に民宿「ふるさと」を出発した。紅葉が赤一色に染まる畑雑湖や、奥大井川の溪谷美に見とれながら散策する人々の間を車で通り抜ける。赤石沢橋で下車、濃紺の空に紅葉と頂上付

隊に決定。二月九日の理事会において承認されましたので、報告します。

- K2 遠征隊二〇〇〇 (K2 東壁) 隊長・山野井泰史 助成金額七十万円

- 信州大学ガネツシュヒマールⅡ登山隊二〇〇〇 (Ⅱ峰西面) 隊長・吉田秀樹 助成金額三十万円

残念ながら助成対象とならなかった登山隊も含めて、安全で実り多い登山の成果を期待しています。

近の新雪の白さが調和して見事で、今が紅葉の真つ盛りである。

樺島はかつての飯場棟がすっかりモダンなプレハブ棟に建て替えられていて、昔の面影はわずかに残るのみであった。

駐車場の南側から、今では鳥森山遊歩道と名づけられ、手入れされて歩きやすくなった道を先発隊は先に登って行く。しんがりを現役長老九十三歳の牧野衛名誉会員に、私と望月福次君が付き添って登る。落ち葉を踏み、秋の山を楽しみながら、たどり着いた鳥森山の頂上では、先に到着して弁当を広げる人、昨夜の残りの一升瓶を傾ける人、頂上から望める赤石岳や荒川三山を写真に収める人と、それぞれが満喫していた。

牧野さんを囲んで記念撮影をし、下山。風もなく静かな山行日和の一日であったが、翌日からはまた雨降りの天気が続いた。(水野公男)

平成十二年新年会

一月十五日、静岡市のベルパレス鷹匠が全面改築されたのを利用して、午後四時から支部会員三十名が集まって新年会を開催した。

このところ一月十五日は雨にたたられたが、今年はその心配もないようだ。定刻を回ったところで、水野が司会を務め、大石惇支部長の挨拶

が始まる。

今年には静岡支部創立五十年にあたり、記念行事や記念の海外登山、記念誌の発行等多事にわたる準備で多忙の年を迎えるので、支部会員の協力を要望する挨拶の後、牧野衛名誉会員の音頭で乾杯。

懇談に入ると、さすが中年組の酒のピッチの早いには驚いた。

宴半ばで、またまた西川信義会員の隠し芸「手品」が披露されたが、昨年よりだいぶ腕を上げたようである。手土産の酒やワイン、ウイスキーが切れたところで、話題は尽きないけれど、新年会を終了し、二次会場に移動した。(水野公男)

南米アンデス花の山旅

アンデス・ブランカ山群ハイライトとクスコ・マチュピチュ 9日間
ブランカ山群を望む街ワラスを基点に、車で周辺の峠や谷を訪れ、雪山や氷河の大パノラマを堪能。
発着地:東京・大阪

旅行期間	旅行代金
5/29(月)~6/6(火)	¥480,000
6/12(月)~6/20(火)	¥480,000
6/26(月)~7/4(火)	¥480,000

アンデス・ブランカ山群トレッキング11日間
ブランカ山群随一の美しさを誇る谷をめぐる、テント4泊のトレッキングコース。4,750mのウニオン峠を越えます。
発着地:東京・大阪

旅行期間	旅行代金
5/25(木)~6/4(日)	¥430,000
6/8(木)~6/18(日)	¥430,000
6/22(木)~7/2(日)	¥430,000

運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員



〒105-0003 港区西新橋1-12-1 (西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(6444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

東西南北



イラスト・宇都木慎一

山名を大切にしたい

山村正光

山梨県は首都圏から近いこともあって入山者が多く、喜ばしい限りである。ただ、最近気になるのが、山名がおろそかにされているように思えることである。

「山」二月号の97同期会の山行案内に「棚横手山」と載っている。山頂の三角点脇の標柱に、確かにそう記してあるが、本当は「大滝山」である。古くは、江戸時代の『甲斐國志』『甲斐叢記』も、大正十二年刊の『二日二日山の旅』昭和四年発行の『大菩薩連嶺』も、昭和三十四年出版の同名の書も大滝山で、棚横手山とは出ていない。

棚横手というのは、大滝不動から大滝山東面の山腹を縫い、深沢峠を経て深沢山の南面を巻き、日川右岸に続く作業道の名前である。仕事道なので山頂を通らない。近くに地蔵

横手もあり、塩山、勝沼から日川筋への仕事道のひとつであった。棚横手の上にあるから棚横手山では少し安易すぎるのではなからうか。

日川の対岸に、岩崎山がある。これに「日影雁ヶ腹摺山」なる山名をつけて得々としている東都の山岳会がある。近くに、雁が腹を摺るほどの裸地も鞍部も見当たらない。何か根拠があつて山名を変えたのか。

最近人気の、御坂前衛の釈迦ヶ岳の西の三角点は、古くから「黒打の頭」といつていた。これに地元、御坂町では「神座山」の銘板を建てた。従来からの「神座山」は「大崩山」と名を変え、最新の二万五千分の一の地図に、その名が載った。

ミレニアムに便乗してはしゃいでいるのが、山梨県の早川町と〇〇なる御仁。静岡県安倍川の最奥、日本三大崩れのひとつ、大谷崩れがある。この頂点を「大谷嶺」とか「大谷崩れの頭」と呼んでいる。三角点は十三年前に崩落して存在しない。点名

は「行田^{ぎょうだ}」。地図上の標高一九九九・七メートルなので、地元早川町では二〇〇〇年の山としてキャンペーンを開始、駐車場を新設、登山道を改修した。山名も「行田山」と称して山頂に記念碑まで作つた。

本当の行田山は、この山より東の一八五九メートルの頂である。静岡側では五色沢のつめなので、「五色の頭」といつている(雑誌『山』昭和二十七年六月号に平賀文男の山名同定の経緯が載っている)。

日本の近代登山の黎明期から私たちの先輩は、古書にあたり、実地探查を重ね、討議を繰り返して山名を同定し現在に至つた。この貴重な成果を、いとも簡単に変えてほしくない。これが偽りのない気持ちである。

田口二郎氏の『山の生涯』とアイガーヴァントをめぐる・2

近藤 等

■アイガーヴァント下山後のこと

三回のピバークをすまして西面から下山したH・ハラ、A・ヘックマイヤー、F・カスパレク、L・フェルクの一行はアイガーグレッツチャー駅のホテルで温かいもてなしを受け三日ぶりの食事にありついたが、

彼らを悩ませたのはあまりにも大勢のジャーナリストに取り囲まれてしまったことだ。さらにベルンのドイツ大使館から急遽やってきたナチ党員の制服を着た男が、中立国スイスの国内であるにもかかわらず、ナシヨナリズムむき出しの不愉快な演説を臆面もなくやつてのけた。こうしてしゃべつたふるまいがグリーンデルワルトの人たちに嫌がられたのは当然である。しかし、グリーンデルワルトに引き上げた一行はすべてのインタビュ、招待を断り、ガイド組合が主催したガイド、アルピニスト、友人たちだけの歓迎会に出席した。

初登攀のニュースは世界各国で大きく報道された。私も山が好きになり始めていた高校生の頃、朝日グラフに数ページにわたつて掲載された写真のことを覚えている。

ところで、下山したその夜、思いがけない祝電が届いた。差出人はヒットラー総統。ナチの制服を着込んだ党員たちは第三帝国の英雄にしてしまった四名を、まるで人質のように無理やりに祖国ドイツに連れ帰つてしまったのだ。

「これでアイガーの次にグラント・ジョラスを登りたいという思いは断念せざるを得なかった……、いまになつてみれば、あの時はこうすべきだったとか、ああすべきだったと言

うのはやさしいが、当時は反響の大きさに麻痺状態になってしまい、他人の意思に巻き込まれてしまったのだ。それにナチがその後どのような道を進むのかは政治にあまり関心はなかった山男たちには想像もつかなかったのだ」とヘックマイヤーはその自伝「ベルグシュタイガーとしてのわが生涯」(Mein Leben als Bergbauer 1972。この本は残念ながら横川文雄氏も邦訳していない)の中で書いている。

ドイツに帰国するとヘックマイヤーたちはナチ党員の制服を着せられ無理やりにヒットラーに面会させられた。また新聞、雑誌に四人ともナチ党員の証印を押され、偉大なドイツ第三帝国の栄光のためにアイガーヴァントを征服したのだとおだてあげられたが、これはヘックマイヤーの言葉によれば「まったくばかげたことであつた……当時の多くのアルピニストと同じように、わたしは政治にはまったく関心がなかった。この初登攀は新聞で大反響をよび、私たちを勇敢な英雄として煽り上げたことから、この登攀はナチが着想したものだ」と誤った見解が生じたのだ。同じような災難はカシンがリードしてグラント・ジョラス北壁のウォーカー・バットレスを征服したイタリア人たちにもふりかかった。

しかし私たちと同じように、カシンとその仲間の登攀はもっぱら山への愛によってのみ動機づけられたものであることを確信している」

指揮者のカラヤンがナチ党員だったという事で第二次大戦後音楽活動ができなかった一時期があったが、アイガーの初登攀者たちも、不本意ながらナチのプロパガンダに利用されたのは事実のようだ。(以下次号)

ぜひマロリーの原文を

星野修二

二月号の本多氏の文を読んで、昔友人たちとした話を思い出した。それはマロリーの言葉は、必要以上に深遠に取り上げて解釈するよりも、言葉のやり取りの中で軽く主題をはずして答えたものと考えるほうがよいのではないかということである。自分の行為を他人に説明するのは、普通のことでも難しく厄介なことが多い。まして登山行為や冒険は情熱的であればあるほど話にくいことである。なぜ詩吟をやるかといわれて、親父がやってたからと答えたり、どうして競馬好きになったのかの返答に、競馬場が家に近いからだというように、まともな答えをせず、相手をいなししてしまうことは日常多

く行われる。思い入れが強ければ、その場所によっては話す気になれないし、面倒であったりする。言葉にすると、かえって本心から乖離していくということもしばしばあることである。マロリーのように鋭敏な人はそれを巧妙に避けたということではないかと思う。

この言葉は、だから、あまり真つ当に議論するとかえっておかしくなるわけで、この当時これが何か哲学的な真理を含んでいるように取り上げたのが、幾分見当はずれだったような気がしている。

マロリーの遺体の発見はわれわれ山好きにとつて、久しぶりに心を興奮させる事件であつた。本多氏の資料はぜひ原文で読みたいものである。それによって以上の解釈が間違っていることがわかるなら、それはそれでありがたいことである。

ふるさとの山・川を考える

上野幸人

岩手県のある交流集会場でのことである。三人のパネリストが演壇の上で、この町のこれまでの歴史とこれからのあり方を語っていた。彼らは過疎化する町を活性化するために「経済的な豊かさが必要である」、

そのためには「施設が必要である」と。彼らの話を聞きながらハイゼンベルクの言葉を思い出していた。

「部分と全体、複雑から単純、そして、その繰り返しの現世界。極から分散、散らばりから集中。家族社会から世界全体への物理的現象」

われわれの生態も含め、生き物たちの世界は離合集散を繰り返している。その中でカオスが生じコスモスが生まれる。これはギブソンが称えたアフオーダンス論とは違う道筋である。ハイゼンベルクの言葉から導かれた思いである。

彼らの言う地域づくり。なぜ、過疎だから地域活性が必要なのか？そのために開発行為が必要なのだろうか。「まほろば」の意味が、「おだやか」というのであれば、この地に作られてきた「山・川」と、そこから見える「空の広がり」を残してゆくべきではないだろうか。施設をたくさん造り、一時的に金回りがよくなつても何の解決にもならない。地球という世界全体を見て、われわれの行為が正しい選択肢なのかを考えなければならぬ、と思う。

この町に限らず私たちに残された「ふるさとの山と川」は、経済優先の、もの社会に利用されてゆくのだろう。今一度考えなければならぬ時ではないだろうか。

会務報告

二月理事会

日時 二月九日 十八時三十分〜二十一時

場所 日本山岳会会議室

出席者 大塚会長、大森、竹内各副会長、西村、村井(龍)、森、宮崎、高原、勝山、村井(葵)、高遠、宮下、鰐坂、増山、坂井、河西、山本各理事、中村監事、中川、平野、吉永各常任評議員、

「委任」小倉副会長、松原、坂本各理事、神崎監事、平山、田邊各常任評議員

○議事に先立ち、大塚会長、大森副会長より、二月五、六日蔵王で開催された東北地区集会(山形支部主管)参加の報告があった。

【審議事項】

一、アルパルタプロジェクト二〇〇〇

○の募金(大森副会長、増山)

募金要項(目標額三百万円、募金組織を委員長・大森薫雄、事務局長・絹川祥夫など)の提案があった。一部通信費予算などの変更をもって承認

●募金は百周年を見据えて行う必要がある。●トレッキングは盛況(今回応募七十四名で定員六十名をオーバー)だが、短めの日程のものもある

るとよかった、などの意見があった。二、平成十一年度海外登山基金の助成(大森副会長、坂井)

海外登山基金委員会より、今年度は八隊より申請があった。「困難を求めている挑戦、発想の新しさ、夢大なる計画」に即した登山ということ、次の二隊に助成したい。

① K2遠征隊二〇〇〇、隊長・山野井泰史(34) K2(八六一一メートル) 東壁

② 信州大学方ネットシユヒマールII 峰登山隊二〇〇〇、隊長・吉田秀樹(46) ガネットシユヒマールII 峰(七二一一メートル) 西面

三、「山の映画を見る会」への後援依頼(鰐坂)

山の映画を見る会(代表・塚本福治郎、今回の共同主催・信毎文化事業団、富山県・立山博物館)が山岳映画を五月、六月に東京、松本、富山で一般公開する(上映作品「雪の薬師越え」「絶険北鎌尾根」)について後援依頼があった。承認

四、転載許可願(西村)

同人シルパタートル(代表神崎忠男)より同会報告書の中で、当会「マナスル登山報告書」記載の地図の転載願があった。承認

一、自然環境研究センターより検討

【報告事項】

一、自然環境研究センターより検討

さんげんだより

4月29日
開所します

山研運営委員会

今年の山研は、主催、共催の各種企画もあって、ますます面白くなりそうです。

山研の利用について、もう一度簡単に説明しておきます。

●利用料金(一泊)

会員および会員配偶者 三千元

団体加入、学生部 三千元

外国人利用 三千元

非会員 五千元

小学生以下 千五百円

●食事 自炊が原則。調味料、調理器具、電子レンジは備えてあります。希望者にはご飯、味噌汁を

三百五十円で管理人が用意します。

●設備 一階集会室(ダイニングルーム)II新ストロブ、三十名程度座れるテーブルと椅子があります。二階は「梓」(十畳、八〜十名)、「穂高」(八畳、五〜六名)で寝室です。寝袋もあり、二十五名は宿泊可能です。地下IIトイレ、バスルーム、乾燥室、資料展示室です。

●予約 宿泊、その他利用に関する問い合わせは直接山研管理人へ。

TEL・〇二六三・九五―二五三三

委員就任依頼(森)

標記、「平成十一年度富士山頂上部における保護と利用のあり方検討部会」へ委員就任依頼があり、森が

委員就任依頼(森)

委員に。今年度は委員会を三回開催予定。基本的な方向性をまとめる。

二、委員会報告

財務委員会・村井(龍)

①第三四半期の監査を神崎、中村両監事より受けた。特に問題はなかったが、伝票記入は内容がわかるようにとの忠告があった。

②今月の会計報告

③委員会関連の今年度決算、来年度予算状況について別個に確認された。

④「海外登山基金」「秩父宮記念山岳賞」の増額を検討している。

●金利の変動で額が変わるのはおかしい、上限下限を決めてはどうか(吉永) ●秩父宮記念山岳賞については金額が高い、低いだけではないと思う(竹内)、などの意見があった。

指導委員会・宮崎(松原代理)

一月三十日より二月一日まで、八ヶ岳において一般参加九名、学生十一名、計二十名の参加者のもと、アイスクライミング研修会を実施した。

海外連絡委員会・増山、中村

①アメリカン・アルパイン・ジャーナル(AAJ)編集長クリスチャン・ベックウイズ氏が二月十三日來日。十四日当会來訪、京都、六甲、広島を訪問し二十二日帰国の予定。

②オーストリア・ザルツブルグ政府観光局より四月から来年十一月まで開催する「山への誘い」へ、「マナスル初登頂」などのフィルム協力の話があり、検討している。

高所登山研究委員会・坂井

日本人の八千メートル峰の登頂者

へアンケートを予定している。H A Jでは、海外の山へ行く人のための情報センター設立の話があった。また、一九八〇年以降、六千メートル峰の登頂者アンケートを予定している由、連携を取りながら進める。

ミニ水力発電実行委員会・吉永

別紙のようにミニ水力発電関連の収支を報告。

会報委員会・村井

二月号はミニ水力発電、「秩父宮記念山岳賞」実施大綱、実施細則の改正を掲載。

総務委員会・西村、高原

①写真展開催案内を会報二月号に。

②支部事務局会議を二月二十六、二十七日に開催する。初日は午後一時水道橋グリーンホテル、二日目は午前十時より当会会議室を予定。支部の抱える問題点、活性化の方法などを主に議論したい。二日目は事務連絡、質疑応答を予定。

③四月一日午後二時より、後期新入会員オリエンテーションを開催する。各理事の出席を望む。

青年部・山本

ドキュメンタリー会社「フィルムオアシス」より、一九九六年青年部K2登山隊のビデオテープ、写真の貸し出し依頼があり、応じる予定。

自然保護委員会・河西

機関紙「木の目草の芽」第三十九

号発行の案内。

その他・西村、村井(龍)

①二月二十二日、常務理事会を開催。平成十二年度事業計画、収支予算について。

②会費未納による除籍対象者一覧。

■会員異動

物故

森本陸也(八六三八) 00・2・21

宮崎辰雄(六三三二) 00・2・22

洲崎幸久(二四一九) 00・2・26

退会
赤嶺辰男(二〇九〇二)

ル
ー
ム
日
誌

2月

1日 アルパインスケッチクラブ

2日 二火会

3日 財務委員会 山の自然学研究

4日 97同期会

7日 総務委員会 アルパータ実行

委員会

8日 常務理事会 二火会 フォト

ビデオクラブ アルパインス

ケッチクラブ

9日 理事会 会報編集委員会 99

同期会 ジャック93会 96同

期会

10日 学生会

14日 海外連絡委員会 アルパイン

15日 集会委員会 資料・データバ

16日 山研運営委員会 95同期会

17日 科学委員会 遭難対策委員会

18日 総務委員会

19日 図書委員会

20日 図書委員会

21日 委員会 総務委員会

22日 常務理事会 自然保護委員会

23日 緑爽会 山げらの会 アルパ

24日 インスキークラブ

25日 学生会 98同期会

28日 総務委員会

コンバスグラス HB-3

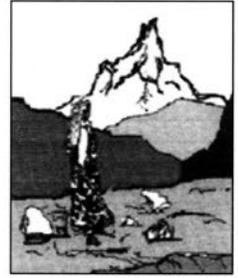
広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまますい磁気方位です。



重量78g.
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600
黄褐色メタリック ￥18,000 消費税別
カタログ代無料、電話、FAX、葉書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3828-5411 FAX 03-3828-5411

株式会社 石神井計器製作所

INFORMATION



イラスト・村上直温

◆徳本峠越えとウエストン祭

山研運営委員会

対象は平成十一年度入会の一・二・九
七一番以降の新会員です。徳本峠を
越えて上高地入り、「山研」に一泊
してクラブライフを満喫。翌日ウエ
ストン碑前祭に参加します。

日程 六月三日 徳本峠越え

四日 ウエストン碑前祭参加

費用 一万円(一泊三食 懇親会費)

締切 五月十七日

申込 ハガキに氏名、会員番号、住

所、電話を明記して山研運営

委員会へ。先着二十五名。

*申込者には詳細を送付します。

◆入門登山講座を開催

指導委員会・集會委員会共催

登山初心者が気軽に訪れる都市近
郊の山でも、登山事故は発生してい
ます。入門者が陥りやすい事故事例
と、その対策を具体的に考えます。
会員外の方にも門戸を広げていま
誘い合わせてご参加ください。

日時 六月二十二日(木)十八時三十分
場所 日本山岳会会談室

テーマ ケース・スタディ「都市近
郊山城の登山事故事例と身の
守り方」

講師 奥多摩消防署山岳警備隊長、
松原尚之指導委員会理事

申込 電話で事務局へ 先着五十名

◆予告・探索山行

「分水嶺と高山植物を探る」

科学委員会

日時 七月一日(土)〜二日(日)

場所 湯の丸高原(ロジジ花紋泊)

交通 東京よりバス往復予定

*詳細は次号に掲載します。

◆第三十八回木暮理太郎翁

碑前懇親会 主催・山梨支部

本年は第三代会長木暮理太郎翁の
碑建設五十周年の節目の年、盛大に碑
前懇親会を行いたいと思います。

日時 五月二十七日(土)〜二十八日(日)

場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山平

交通 J R 中央線韮崎駅下車、増富

温泉行きバス終点下車、徒歩

九十分(タクシーの便あり)

宿泊 金山山荘・例年の有井館の隣

TEL・〇五五一・四五・〇四三五

行事・山行

二十七日十八時 懇親会

二十八日朝、碑前祭の後、比志く車

く大根越路く雨竜山(二二二

四メートル、二万五千分の一

図書受入報告 (2000年2月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
深野稔生	深野稔生の宮城山遊び山語り(蔵王・二口編)	214pp/22cm	無明舎出版	1999	出版社寄贈
深野稔生	深野稔生の宮城山遊び山語り(栗駒・船形編)	204pp/22cm	無明舎出版	1999	出版社寄贈
小宮哲雄	韓国の山歩き:20山行記録	84pp/26cm	小宮哲雄(私家版)	2000	著者寄贈
内田嘉弘	大和まほろばの旅:奈良県北・中部の山	217pp/20cm	ナカニシヤ出版	2000	出版社寄贈
伊藤尊仁	【鳥屋山】の足跡	71pp/26cm	伊藤尊仁(私家版)	1999	著者寄贈
西丸震哉	僕はこんな旅をしてきた	417pp/19cm	ディーエイチシー	2000	出版社寄贈
電電山岳連盟(編)	ヒマラヤへの道 山の仲間	345pp/22cm	東京出版センター	1970	発行者寄贈
電電九州山岳会(編)	ヒマラヤへの道II:山の仲間50年の軌跡	419pp/22cm	電電九州山岳会	1999	発行者寄贈
井出孫六(編)	日本百名峠[新装版]	365pp/22cm	メディアハウス	1999	出版社寄贈
天野礼子	川よ	239pp/20cm	日本放送出版協会	1999	出版社寄贈
Bush山の会(編)	Bush創立30周年記念:日華親善玉山登山報告書('86.12/27-'87.1/7)	43pp/26cm	Bush山の会	1999	発行者寄贈
JCC(編)	JCC Climber's Report:日本クライマーズクラブ創立40周年記念誌	245pp/30cm	JCC	1999	発行者寄贈
大下春子(編)	みづゑ(第81号):大下藤次郎記念誌	60pp/23cm	春鳥會	1911	山田敏男氏寄贈
田村剛・武田久吉	仙境尾瀬の景観	73pp/22cm	大日本山林會	1928	山田敏男氏寄贈
熊谷樞	スキーをはげば怖くない(樞・画文集No.8)	215pp/19cm	グリーン・プレス	1999	著者寄贈
岐阜県山岳遭難対策協議会	この岳に生きる:北飛山岳救助隊結成40周年記念誌	115p/26cm	岐阜県山岳救助隊	1999	発行者寄贈
同志社大学山岳部(編)	DAC報告21号:ガムッシュ特集(1974~1977)	144pp/26cm	同志社大学山岳部	1979	発行者寄贈
同志社大学登山隊(編著)	ドブライエ・ウートル:同志社大カムチャツカ日合同学術登山隊報告	256pp/27cm	同志社大学山岳会	1993	発行者寄贈
同志社大学理工学研究所	アラスカ学術調査(同志社大学理工学研究所報告1966年3月)	/26cm	同志社大学	1966	発行者寄贈
明治大学登山隊(編)	明治大学マナスル・アンナプルナI峰登山隊報告書1997年	132pp/26cm	明治大学炉辺会	1999	発行者寄贈
スタイン(著)澤崎順之助(訳)	中央アジア踏査記[新装版]	320pp/20cm	白水社	2000	出版社寄贈
スタイン(著)山口静一他(訳)	砂に埋もれたホータンの廢墟	458pp/22cm	白水社	1999	出版社寄贈
熊本日日新聞社(編)	熊本百名山:高山から里山まで(自然探訪III)	227pp/21cm	熊本日日新聞社	1998	熊本支部寄贈
酒井春海他(編)	中央アルプス三ノ沢遭難事故報告書:1998.7月春日井正信	58pp/26cm	吉本一男(私家版)	1999	瑞浪労働者山岳会寄贈

地図「谷戸」(徒歩約二時間。山行後、比志神社で昼食、JR甲府駅で解散。
費用 一万円(懇親会、記念品、一泊三食、飲み物代、甲府駅までの交通費を含む)

申込 五月二十日までに山村正光宛
(〒四〇〇・〇〇一六 甲府市武田三三六・二七 丸・〇五五・二五一・三二七五)

◆96同期会二〇〇〇年講演
「三角点入門」

山中で見かける三角点。一点ずつに名前、コード番号が存在し、設置年月、設置者などの記録もあります。それら各種三角点を紹介します。

日時 四月十五日(土) 十四時
場所 日本山岳会ルーム
講演者 遠山元信
参加費 無料
問合せ 飯田邦幸(丸・〇三・三三二六八・九六五四)

◆96同期会二〇〇〇年山行

日時 四月十六日(日)(雨天中止、東京の降水確率三〇%の場合)

場所 奥多摩・川乗山
集合 青梅線鳩ノ巣駅改札口八時十五分(立川駅七時八分、拝島七時二十分奥多摩行き乗車)

行程 鳩ノ巣駅→大根ノ山ノ神ノ川乗山(昼食)→百尋の滝→川乗橋(バス)→奥多摩

乗橋(バス)→奥多摩

申込 四月十五日までに菅原紀彦へ(丸・〇四・三三・六六・〇〇四一、携帯〇九〇・九一三〇・七五一六)
*昼食は各自持参。

◆第十回懇親山行「丹沢」

92同期会

春真っ盛りの丹沢を、岳ノ台を目指しながらじっくり味わいましょう。

日時 五月十四日(日)
集合 小田急線秦野駅改札口八時三十分
行程 菩提峠から岳ノ台へ
申込 五月七日までに大貫金吾まで(丸&丸・〇四八・四七二・二二九九)

◆還暦セーター頒布のお知らせ

赤シャツ土曜会

一部会員の間で胸にJACの文字とご本人の還暦年号を入れた赤いセーターを作り、愛用してきました。最近このセーターを作ってほしいという声を聞き、製作することにしました。ご希望の方は赤シャツ土曜会まで。申込書を送付します。

申込資格 還暦過ぎの会員(還暦前の方ももちろん結構です)

価格 一万四千元
寸法 S, M, L
締切 七月三十一日
問合せ 内藤勇(丸・〇三・三四四一・四八〇二)

◆山の自然学講座のご案内

自然保護委員会と山の自然学研究会で一九九三年から実施している「山の自然学講座」も百三十回を超えました。自然保護の活動者・指導者のため、という目的で会員外にも声をかけています。お申し込みください。大森弘一郎(丸・〇四五・八三三・八五〇五)までご連絡ください。

今後の予定
四月〃八日、十六日、二十二日
五月〃十三日、二十七日、二十八日
六月〃二、五日、十、十二日、二十三日

七月〃八月二、十二日、二十二、二十三日、二十八日、八月二、二十三日

九月〃一、四日
*座学(環境パートナーシップオフィス会議室)と現地講座(山へ入る)の二種類です。

◆「台湾地震募金」結果の報告

世話人代表・藤平正夫

昨年九月発生の台湾大地震に際し、被災山地復興のための義援金を募りましたところ、応募総金額は百四十六万円余となりました。通信費など諸経費を差し引き、百四十二万円を中華民国山岳協会宛寄贈しました。会員各位のご協力に対し深く感謝し、最終報告とします。

◆編集後記

JACの蔵書は薫り高い山岳文化の結晶です。四月号は水野勉会員に図書室の歴史と特徴を解説してもらいました。

内外の山岳書約一万三千五百冊を誇る蔵書は巨大な智慧のケルン。会員のための貴重な財産です。手に取った書籍には先蹤者の熱い魂魄が込められています。多くの会員に、乾いた心を癒すオアシスとして、志ある戦略を練る場として、深遠な山岳研究の学び舎として利用されてきました。

新入会員や地方支部会員の方にも、豊かな知の海に浸り、大自然の快い波動を愉しんでいただけたらと考えます。大いに活用し、遊び心を高めてください。

図書に関する問い合わせは、担当職員、田村典子さんにお尋ねください。
(村井 葵)

日本山岳会会報 山 659号
2000年(平成12年)4月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 大塚博美
編集人 村井 葵
印刷 株式会社 双陽社